

「構造的ギャップ」の意味すること

当 HP の「学究の場と現場との構造的ギャップ」の記載に関し、あるメル友から「『学究の場と現場との構造的ギャップ』と言う意味がよくわかりません。」というご指摘がありました。言葉足らずで申し訳ありませんでした。僕の云わんとする「構造的ギャップ」とは以下のような意味でした。

学会に集う大学等の先生方も、社会的には障害児の専門家と見られ、一方、福祉の現場の職員も、同様に専門家と見られています。

学会のような場では、障害児をどう支援していくかの研究の内容を基に議論されているものと、一般的には思われています。そうした成果が、活かされない、活かそうとしない（母親の報告のような職員の資質の問題も含め）現場という、この福祉、障害児教育面の二重構造はなんなのかということです。もちろん、数は少ないですが、現場に定期的に入りし取り組んでいる先生方もいますし、学会等に参加して研修に励む現場の職員もいるにはいます。そうした個人の資質の問題と組織・社会の問題という両輪が相まってこそ車はスム - ズに動くと思うのです。

つまり、大雑把に言って、障害児への支援のあり方を追い求める学究の方々と、まさに障害児に対面している現場との繋がりがシステム化されず情報が活かされていないのではないかと思い、それを「構造的ギャップ」と標記した訳です。大胆に言えば、福祉、障害児教育分野でも真の内容あるよく云われるところの「産学共同」（単なる連携だけでない）のシステム化です（システム化されれば全て解決されるとは毛頭思っていないが...）。

養老孟司著の「逆さメガネ」にも同様なことが記載されていますが、知識は日々の生活行動に活かされてこそ意味があり、日々の体験する生活に活かされない知識は、単なる情報です。今の社会は情報が溢れてはいますし、情報に振り回されているきらいが多く、個人レベルでは折角の情報が如何に単に「トリビアの泉」で終わっていることが……。その知識を如何に人間の日々の生き方に活かすかの議論は、少ないように思われます。

正に数少ないこうした論議の場を社会に提供し発信するのは、福祉分野であり、障害児教育分野と常々思っています。それだけに、「構造的ギャップ」は、クリアしなくてはならないことと思っています。じゃあ、どう構築するかが解らず考え込んでしまい、皆様にご意見をお願いした次第です。

（2003年09月25日記）